

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007~2008

課題番号：19520054

研究課題名（和文） 赤外線写真を用いた中央アジアの禅観図の研究

研究課題名（英文）

A Study of Central Asian Paintings of Meditating Monks Using Infrared Pictures

研究代表者

山部 能宜 (YAMABE NOBUYOSHI)

東京農業大学・農学部・教授

40222377

研究成果の概要：

中央アジアの禅観僧壁画に対して、可視光カットフィルターを用いた撮影を試み、壁画に対する赤外線写真の有効性を確認した。また、敦煌における観経変相の『観無量寿経』からの乖離の問題に関する考察を進め、当時の絵画作製状況の一端を明らかにした。さらに、石窟の用途に関する考察を行い、小側室を伴い禅観僧の壁画をもつ石窟のすべてが禅定窟とは必ずしも言い切れないことに注意を喚起した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：仏教学，美術史，石窟，壁画，新疆，観経変相，報恩経変相

## 1. 研究開始当初の背景

私は、近年中央アジアに関わりが深いと思われる禅観経典を中心に研究しているが、その一応の成果を『観仏三昧海経』の成立をめぐる学位論文として纏め、1999年に提出したのである。

学位論文以後も、私は同じ方向の研究を継続している。特に、2004～2006年度に交付された科学研究費

補助金によって、従来トゥルファン地域に焦点を当ててきた私の研究をクチャおよび敦煌まで広げるべく、現地調査を行ってきた。その際、クチャ地域のキジル石窟・クムトラ石窟、トゥルファン地域のトヨク石窟・バイシハル石窟等に残る禅観僧壁画の写真撮影および観察を行ったのに加えて、パリ・ギメ美術館において敦煌より将来された仏画の撮影・観察を行った。これらの調査により、多くの貴重なデータを

得ることができたのであるが、惜しむらくは、これらの美術資料は壁画・絹絵とも劣化が著しく、通常の撮影で得られるデータには限界がある。特に絵画に添えられた題記（文字による解説）の退色が著しく、肉眼での観察および判読は非常に困難な状態となっているのである。これらの壁画・題記のより鮮明な画像を得ることができれば、この分野の研究を大きく促進するものと思われた。

## 2. 研究の目的

本研究の最終目的は、禅観僧の壁画のより鮮明な写真を手がかりに、中央アジアでかつて行われていた禅観の実践内容を明らかにするとともに、中央アジアにおける実践・文献・美術の相互関係を明らかにし、さらにはその背景にあった国際的な文化交流をも解明することにある。

## 3. 研究の方法

関係する壁画の赤外線写真と可視光写真の撮影を行い、その内容を分析した。また、これと併行して、中央アジアにおける禅観の展開に関わる諸問題を総合的に考察した。今回は、以下の諸問題に特に注目した。

(1) トウルフアン・トヨク石窟に見られる禅観僧壁画が、『観仏三昧海経』『観無量寿経』等と密接に関連しつつも、文献と壁画の内容にはかなりの乖離も見られることは、私がこれまでの研究で指摘してきたことであった。私は、この現象は当時トウルフアン地域ではまだ行者達の実践の伝統が生きており、多様な形態の伝承が併存していたからだと考えている。ここで一つ問題になることが、敦煌の観経変相にも、特に後期のものには典拠であるはずの『観無量寿経』とかなり大きく齟齬する点が見られるということである。しかし敦煌の観経変相にみられるこのような文献との乖離については、基本的に画師達による伝承過程で起こった写し崩れの結果と捉えるべきで、実践を反映したものではないと私は考えている。今回は、ロンドンのストーン・コレクションと、パリのペリオ・コレクションに含まれる観経変相その他の関係資料を実見し、この問題に関する上記考察を検証するとともに、さらに前進させた。

(2) 石窟の用途の問題については、中央アジアには、主室の周囲に幾つかの小部屋が附属した石窟が各所に現存している。これらの石

窟は通常禅観の修行に用いられたものと考えられており、「禅定窟」と呼ばれている。私自身、このような構造を持つトヨク第42窟は、禅観の実践に用いられた可能性が高いものと以前から主張しており、今日でもその考えは変わっていない。ただ、石窟の用途を厳密に決定することは容易ではなく、このような構造をもつ石窟の全てを直ちに禅定窟とみなしていいかどうかについては、疑問の余地がある。今回はこのような石窟の用途の問題に留意しつつ、ベゼクリク、センギム、ヤルホト、キジル、クムトラ、スバシに見られるこの種の石窟を調査したほか、センギムの寺院遺跡を調査した。

(3) また、中央アジアにおける声聞乗の禅観と大乘の禅観の関係について考察した。その際、従来から知られている文献資料とならび、今回撮影した画像資料を用いて考察を進めた。

## 4. 研究成果

赤外線写真については、今回は諸般の事情から原則的に人工光源を用いず可視光カットフィルターのみを用いた撮影となった。ただ、石窟内は全暗黒ではなく扉を開放すればかなり自然光が入るので、フィルターのみによる撮影でもかなりの成果が出たように思う。ただ、残念ながら題記の解読には成功せず、今後さらに技術的検討が必要である。今回の結果を踏まえ、今後は写真の専門家とタイアップしてより本格的な撮影と画像の復元を試みたいと考えている。

それ以外の関連する成果は、以下の通りである。

(1) 『観無量寿経』における観想は、日想観に始まり雑想観に終わる十三観（あるいは、三輩往生も含めた十六観）からなり、その内容は敦煌の観経変相の中に多く描かれている。そのうち初期のものに関しては経典の内容にほぼ忠実に描かれているのであるが、後期のものになると例えば「宝幢観」「宝瓶観」のような『観無量寿経』にはない項目が現れるばかりか、順序にも多くの乱れが生じるようになる。

このうち順序に関しては当時の画師達が、絵画全体の下絵ではなく個々のシーン単独の下絵を用いていたことが知られている。実際の壁画を描くにあたっては、それぞれの石窟のサイズに合わせて、壁面に収まるように個々のシーンを適宜配置して描いていたと考えられているの

である。もしそのようなシーンの便宜的な配置換えが画師達の間で広く行われていたのだとしたら、観経変相の場合も特に深い理由なしに順序が変更されていた可能性がある。

また、観経変相においてはしばしば観想の場面が蛇行形式で描かれているのであるが、経典の内容に通じていない者がこれを見ると、正しい順序を理解することは非常に難しい。この点も、混乱の原因になっていた可能性がある。

個々の要素に関しては、画師による先行作品の誤解によってかなりの部分が説明できるように思われる。例えば後期の観経変相にしばしば現れる宝瓶は、上に仏・菩薩が坐っていない蓮華座の意味が画師達によって理解されず、誤って華を生けた宝瓶と解釈された結果であろう。同じく後期の観経変相にしばしば現れる宝幢は、七重の網と宮殿で覆われた宝樹の表現が、経典の内容を知らない画師達によって正しく理解されず、宝幢と誤解された結果ではないかと思われる。

これらの諸点を総合すると、画師達は直接経典を参照することなく、先行する作品と彼等自身の伝統に基づいて絵画を描いていた可能性が高いと考えられる。以上の点に関しては、Kristi所収の拙稿で論じた。

以上の点をさらに検証するため、ロンドンのスタイン・コレクション及びパリのペリオ・コレクションに含まれる観経変相・報恩経変相その他の関係作品の現地調査を行い、その結果を踏まえつつ考察を進めた。ペリオ・コレクションに含まれる観経変相には、『観無量寿経』冒頭の「王舎城の悲劇」を描く部分に現れるべき霊鷲山から没する釈迦仏のシーンが、十三観中に誤って描かれているものがあることが指摘されている。これに関しては、当該観経変相では初期の作例に見られない阿闍世の前世のシーンが「王舎城の悲劇」に付け加えられているため、霊鷲山から没する釈尊のシーンが、いわば押し出されるかたちで十三観中に移った結果ではなかったかと思われる。

また、この作例には、池水面上の白玉状のものの中に木と兎と蛙の描かれたシーンがある。これは月を表現したものと考えられているが、恐らくは先行する作品で瑠璃の池を表現するために池水上に描かれた大きな玉を月と誤解したものと恐れ、これは十三観がまず日想観、つまり太陽の観想から始まることからの連想でこのように解釈されたのではなかったかと思われる。敦煌仏画の多くの作例で、太陽と月が対になって描かれている

ことから見ても、このことは無理のない想定であろう。

一方、スタイン・コレクション中の報恩経変相には、ペリオ・コレクション中の上記観経変相と表現上非常に類似したものがあり、近い関係にあったことが想像される。この両者を比較すると、非常に興味深いことに気づくのである。問題の観経変相では、釈尊の前で説法を聞く頻婆娑羅王と韋提希夫人の手前に、ひざまづいて合掌する少年が描かれているのであるが、この少年は『観無量寿経』では説明できず、これまで正体不明とされていた。ところが、当該報恩経変相には、これと非常に類似したシーンが描かれており、そこでは少年の存在は経典の内容と合致して、無理なく説明できるのである。従って、この場合報恩経変相中の少年が、類似シーンの連想から観経変相に導入された可能性が非常に高いのである。

これらいずれの場合も、画師達が先行の作品に基づいて製作を行い、経典を直接参照していなかったことが強く示唆される。上述Kristi所収拙稿での論旨は、より範囲を広げた調査の結果も、やはり支持されるのである。以上の点に関しては、2008年11月に創価大学で開かれたシンポジウムで発表した。

(2) 私は以前から、トヨク第42窟が、石窟構造と壁画の両面からみて、禅観の実践と深い関係をもっていた可能性が高いことを論じてきた。このことについての見解は、現在でも変更の必要を認めない。ただ、それ以外の場所に見られる類似の構造を持った窟の全てが禅観の実践に用いられたと言い得るかどうかに、慎重な検討が必要であるように思われる。

まず問題になるのが敦煌莫高窟の最初期の石窟に属する南区第268窟と第285窟である。これらはいずれも、主室の周囲に小側室を有する構造をもち、通常「禅定窟」とみなされている。しかしながら、側室が極端に小さいこと、実践の場としては装飾が華麗過ぎること、側室の入り口に仏龕と同様の装飾（門楣）をもつことなど、実用的な禅観の場として用いられていたと考えるには、いささか不自然な点がある。また、これらの石窟には仏像が安置されているが、禅観経典の記述によると、坐禅の場と仏像を観察する場は別であったことが知られるので、修行の場に仏像がある必要はないのである。

一方、同じ莫高窟の北区には、類似の構造をもちながら、側室のサイズがより大き

く、無装飾で、実用的な修行と生活の生活の場であったと考えて不自然さのない石窟が数多く残っている。恐らく北区の僧坊窟が基本的な修行の場所だったのであって、仮に南区の石窟が坐禅に用いられたとしても、それは限られた時間の、儀式的・象徴的なものだったのではないだろうか。

一般的に、中央アジアの「禅定窟」は、インドの僧坊窟に起源をもつものと考えられているが、インドの僧坊窟の形態自体が、時代の変遷とともに変化していることにも注意すべきである。初期の僧坊窟は、主室の周囲に僧坊が並ぶだけの非常に簡素なもので、装飾や本尊もなく、純粹に実用的なものであったことが窺える。しかし、時代が下ると僧坊窟にも「香室」と呼ばれる本尊を安置する部屋が作られるようになり、また僧坊窟自身が華麗な装飾で飾られるようになる。僧坊窟自体が儀式空間へと変貌していたのであろう。そのような華麗な僧坊窟が、修行の場としてどの程度機能していたかはいささか疑問でもある。そして、そのようなインド後期僧坊窟のスタイルを受け継いだのが、莫高窟の第268窟と285窟であったように思われるのである。

トゥルファン地区では、ヤルホト第4窟とベゼクリク第10窟も、所謂禅定窟形式の構造をもっている。ヤルホト第4窟では、入り口の頂部に光を放つ坐禅僧が描かれているが、これは禅観經典の記述と付合するものである。また、側室はかなり大きく、中には棚のあった痕跡があるが、これは日本の禅堂に最小限の生活用具を置くスペースが設けられていることを想起させるもので、石窟が実用的な目的に使われていた可能性を示唆するものである。

ベゼクリク第10窟も、側室は一定の広さがあり、その内部に用具置きに使われたと思われる小龕がある。また、今日では弁別し難いが主室に禅観僧の壁画があったことも伝えられており、実践的用途に用いられていた可能性がある。

クチャ地区では、スバシの第3窟と第5窟が、身廊の左右に側室が並ぶ「禅定窟」の形式を持っている。第5窟に関しては、頂部に禅観僧の壁画もあり、側室に一定の大きさもあるので、断定はできないものの、実用的用途に用いられていた可能性がある。

しかしながら第3窟に関しては、側室の幅が非常に狭く、かなり広大な石窟に後室一つと側室二つしか附属していないなど、不自然な点がある。実用的用途に用いられたものとは考え難いように思わ

れる。

また、スバシ第1窟も、中窟に7つの小室が付属する構造をもっている。しかし、これは構造・サイズからみて明らかに仏龕であって、禅窟ではありえない。

さらに、現在の番号との対応は不明であるが、スバシの類似した石窟のなかから人骨が発見された例があったことが報告されている。禅窟が後世墓として転用された可能性もあるが、一部の窟は当初より墓として用いられていた可能性も否定できないであろう。

一方、トゥルファンのセンギム第2寺院の第2窟には、主室の両側にそれぞれ三つの小龕があり、中に説法僧が描かれていたことが伝えられている（今日では失われている）。若干「禅定窟」と類似した構造であるが、これは明らかに高僧を顕彰するためのものであって、サイズ的にも禅窟ではありえない。

シクチンにも、小側室と禅観僧壁画をともなう石窟のあったことが報告されている。これについては実見していないが、側室のサイズは非常に小さいものであったようであり、その実用性には疑問の余地がある。

石窟の用途を正確に決定することは非常に難しいことであり、現段階で明確な結論に達することは難しい。ただ、通常「禅定窟」とみなされている石窟の全てが実際に禅定の場として用いられたかどうかはかなり疑問であり、一部のものは儀式の場、高僧を顕彰する場、墓などとして用いられていた可能性を排除できない。石窟の用途は、個々別々に、慎重に検討される必要があるのである。以上の内容は、10月にトゥルファンで行われた学会で発表したものである。

(3) 近年、部派仏教と大乘仏教の連続性が強調される傾向にあるが、禅観の実践においても同様の傾向が見られるようである。

例えば、まず仏像を観察してその特徴を心に焼きつけたのちに、そのイメージに対する観想を繰り返す観仏の行は、大乘的なものと見なされることが多いが、その基本構造は、死体のイメージを心に焼きつけて、それに対する観想を行う伝統的な不浄観の修行と共通するものである。

『坐禅三昧経』は、声聞乗の観法を説く前半部と、菩薩乗の観法を説く後半部に別かたれるが、観想の項目はいずれも不浄・慈心・因縁・阿那般那・念仏で共通しており、具体的な修行内容にも実質的な違いは殆どない。違うのは、行の意味づけと、行の背後にある精神であって、具体的行法ではないのである。

『五門禅経要用法』では、三乗または二乗

の修行を並べて説くところが多く見られるが、いずれの箇所でもそれらの間に本質的な差異はなく、認められるのは程度の差に過ぎない。同様の傾向は、『達摩多羅禪經』にも見て取れる。

また、キジルならびにソルチョコから発見されたサンスクリットの禪經(原題不明)は、説一切有部系のものと思なされているが、非常に強い菩薩思想を含み、大乘と見紛う要素を持っている。

その一方、大乘の禪觀經典であるはずの『觀仏三昧海經』には、大乘的用語は散見するものの、それについての教理的議論は殆どされていない。大乘の禪觀にとって、大乘仏教の教理的要素は必ずしも不可欠のものではなかったようである。

美術資料に目を転ずると、トヨク第20窟では、大乘經典である『觀無量壽經』に關係する禪觀のシーンと、伝統的な仏教説話である『スマーガダー・アヴァダーナ』に關係する禪定僧の空中飛揚のシーンが組み合わされて描かれている。大乘經典『觀仏三昧海經』の中に、『スマーガダー・アヴァダーナ』の空中飛揚のシーンが組み込まれていることから見ても、実践的領域で二乗の間の垣根は低かったようである。

これらの検討結果は、文献成立に関して近年指摘されることが多い二乗の間の連続性と軌を一にするものである。実践の領域においても、二乗の行は密接に關係していたことが窺われる。以上の内容は、*Acta Asiatica* 所収の拙稿で発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① Nobuyoshi Yamabe, The Paths of Śrāvakas and Bodhisattvas in Meditative Practices, *Acta Asiatica* 96:47-75. 2009. 査読有.

② Nobuyoshi Yamabe, Transformation Tableaux “Based on” the *Amitayus Visualization Sutra*: Their Deviations from the Text, *Kristi* 1: 1-31, 2008. 査読有.

[学会発表] (計 4 件)

① Nobuyoshi Yamabe, Indian Myth Transformed in a Chinese Apocryphal Text, Conference “Indian Mythology and the Chinese Imagination,” 2009年3月25日, テルアビブ大学

② Nobuyoshi Yamabe, A Comparison of the Transformation Tableaux on the *Amitāyus Visualization Sūtra* and on the *Favor Repayment Sūtra*, 国際シンポジウム「大衆部, 大乘, ガンダーラ」, 2008年11月30日, 創価大学.

③ 山部能宜, 再次探討石窟用途, 「第三屆吐魯番學國際學術研討會」, 2008年10月20日, トゥルファン(中国).

④ Nobuyoshi Yamabe, Art, Caves, and Visualization, Conference “Visualizing and Performing Buddhist Worlds,” 2007年11月3日, The University of Toronto Scarborough.

[図書] (計 1 件)

① 田上太秀・石井修造編著, 松本史朗, 池田魯參, 石井公成, 伊吹敦, 小川隆, 沖本克己, 川口高風, 山部能宜他. 『禪の思想辞典』(共著), 東京書籍, 2008. 590ページ (p. 98, p. 120, p. 207, pp. 212-13, p. 257, pp. 270-71, pp. 272-73, p. 299, p. 305, p. 366, p. 391, p. 466, p. 470, p. 486, p. 502, p. 507).

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山部 能宜 (YAMABE NOBUYOSHI)  
東京農業大学・農学部・教授  
40222377

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者